国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the so-called “unanalytic negative questions” in Japanese

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 優, INOUE, Masaru
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001148

国立国語研究所報告107 研究報告集 15 (1994)

いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって

井上　優

INOUE Masaru: On the so-called "Unanalytic Negative Questions" in Japanese

要旨：
日本語の命題疑問文（Yes-no疑問文）は，(i)単純命題疑問文「p（～p）カ」（=1），(ii)誘導型命題疑問文「p（～p）ナイカ」（=2）という二つのタイプに分けられる。「非分析的な否定疑問文」と呼ばれることもある誘導型命題疑問文においては，「ナイ」と「カ」が融合して「p（～p）の可能性への誘導」を表すモダリティ表現として機能する。

(1) a．［寒い］か？
　　b．［ぜんぜん寒くない］か？　（単純命題疑問文）
(2) a．［少し寒く］ナイカ？
　　b．［そんなに寒くない］のではナイカ？　（誘導型命題疑問文）

単純命題疑問文「p（～p）カ」は，「当該の文脈においてp（～p）の可能性はまだ排除されていない」という想定のもとで，p（～p）の真偽を問題にすることを表す。

一方，誘導型命題疑問文「p（～p）ナイカ」は，「当該の文脈においてp（～p）の可能性が排除されている」という想定のもとで，p（～p）の可能性を再導入した上でその真偽を問題にすることを表す。固定的表現「p（～p）ジャナイカ」を含め，誘導型命題疑問文の意味はいずれもこの「排除された可能性の再導入」という機能から派生される。

キーワード：疑問，否定，否定疑問，カ，ナイ，ジャナイカ

Abstract: Yes-no questions in Japanese can be analyzed into two types: the normal yes-no questions P ka? (P stands for a positive or negative proposition) as in (1) and the "proposal" yes-no questions P NAIKA? as in (2). In the latter type, called "unanalytic negative questions", nai and ka are fused together and NAIKA functions as a complete independent modal form.

(1) a. [samui] ka?　(It is cold?)
　　b. [zenzen samuku-nai] ka?　(It is not cold at all?)
(2) a. [sukoshi samuku] NAIKA?
　　(Don't you think it's a little cold?)
　　b. [sonnani samuku-nai] no de wa NAIKA?
　　(I don't think it is very cold.)

Normal yes-no questions P ka? are uttered in contexts where the possibility

of P has not been excluded, and are used to confirm whether P is true or not. In contrast, the "proposal" yes-no questions P NAIKA? are uttered in contexts where the possibility of P has (or appears to have) been excluded, and are used to reintroduce the possibility of P to comfirm whether P is true or not.

All the meanings of "proposal" yes-no questions, including the idiomatic expression P JANAIKA, are derived from this "revival of excluded possibility" function.

Key Words: question, negation, negative questions, ka, nai, janaika

0. はじめに

「何かご質問はありませんか？」（促し），「ビールでも飲みに行きませんか？」（提案），「井上さんじゃありませんか？」（推定）といった，「構文法上は否定疑問文であるが意味上は否定疑問文でない」（久野1973）疑問文は「非分析的な否定疑問文」（田野村1988）と呼ばれることがある。

このタイプの疑問文は，使用される頻度もきわめて高く，日本語の疑問文の中できわめて重要な位置をしめると考えられる。しかし，その基本的な意味については，「肯定の答えを予想する」「肯定の傾きを有する」あるいは「話し手の見込みが間違っている可能性を考慮する」「聞き手に話し手の見込みや期待をおしつけることを回避する」といった，文法現象に関する説明としてはやや具体性に欠ける説明しか与えられていない。また，これらの説明が疑問文の体系の中でどのような位置づけを与えられるか（いいかえれば，疑問文の意味を一般的に説明する道具だての中でどのような部品となるか）という点についてもはっきりしない点が多い。

本稿では，非分析的な否定疑問文の基本的な意味・機能を，疑問文の中での位置づけができるだけ明確になるような形で記述することを試みる。非分析的な否定疑問文を最初から「典型的な疑問文ではない」とするのではなく，逆に，典型的でない疑問文に正当な位置づけが与えられる形で「疑問文」というものをとらえるべきである，というのが筆者の基本的な考えである[1]。

1. 命題疑問文の二つのタイプ

まず，本稿で想定する大まかな枠組みについて述べておこう。

終助詞「カ」をともない（あるいは「カ」の省略が想定され），「ハイ」「イイエ」等の肯定応答辞・否定応答辞で答えることができる疑問文（いわゆる Yes-No 疑問文）を「命題疑問文」と呼ぶ。

命題疑問文の典型は，

(1) a. 誰かいますか？
　　b. 誰もいませんか？

のように単純に肯定命題または否定命題の真偽を問題にするタイプである。本稿では，このタイプの命題疑問文を「単純命題疑問文」（以下「単純疑問文」）と呼ぶ。肯定命題の真偽を問題にする単純疑問文は「単純肯定疑問文」，否定命題の真偽を問題にする単純疑問文は「単純否定疑問文」と呼び，それぞれ「ｐカ」「～ｐカ」で表す。

単純否定疑問文「～ｐカ」は「分析的な否定疑問文」と呼ばれることがある（田野村1988）。「ナイ」と「カ」がそれぞれ独立に否定命題の構成と疑問のモダリティの表示に関与すると考えられるからである。

(2)　［［prop 誰もいない］　カ］　　（prop：命題）

これに対し，否定辞を含む疑問文であっても，「促し」「提案」「願望」「危惧」「推定」「催促」等の意味（「当該の可能性への誘導」とまとめられよう）を表す(3)のようなタイプの疑問文は「非分析的な否定疑問文」と呼ばれる。「肯定の答えを予想する」（久野1973），「肯定の傾きを有する」（仁田1991）と言われる否定疑問文はこのタイプに属する。

(3)　a．何かご質問はありませんか？　（促し）
　　b．ビールでも飲みに行きませんか？　（提案）
　　c．こうすればもっとおいしくなりませんか？　（推定）
　　d．早く春にならないかなあ。　（願望）
　　e．そんなに飲んで体をこわしませんか？　（危惧）
　　f．こら，早くかたづけないか！　（催促）
　　g．何か飲みたいんじゃありませんか？　（推定）

本稿では，このタイプの疑問文を，単純否定疑問文と明確に区別する意味で「誘導型命題疑問文」（以下「誘導型疑問文」）と呼び，「ｐナイカ」で表す。

誘導型疑問文の場合，「ナイ」は否定命題の構成に関与せず，「ナイカ」全体で「当該の可能性への誘導」（その具体的な内容については3. で述べる）を表すモダリティ表現として機能すると考えられる。（「非分析的な否定疑問文」といわれるのもそのため。）

(4)　［［prop 何か質問がある］　ナイカ］

「～ｐの可能性への誘導」を表す「～ｐナイカ」は，

(5)　こんなにちらかっていると，［仕事ができない］んじゃないか？

のように「～ナイノデハナイカ」の形をとるのが普通だが，

(6)　こんなにちらかっていると，［仕事ができなく］はないか？

のような形も不可能ではないだろう[2]。

本稿では，誘導型疑問文は単純疑問文とならんで命題疑問文のひとつのタイプを構成すると考える。「非分析的な否定疑問文」という名称を用いないのも，誘導型疑問文（非分析的な否定疑問文）と単純否定疑問文（分析的な否定疑問文）とで「否定疑問文」という意味的なカテゴリーが構成されるとは考えないからである。

Ⅰ：単純疑問文（非誘導型疑問文）

Ⅰａ：単純肯定疑問文（ｐカ）

e.g. ここの餃子，おいしいですか？

Ⅰｂ：単純否定疑問文（～ｐカ）

e.g. ここの餃子，おいしくない（＝まずい）ですか？

Ⅱ：誘導型疑問文

Ⅱａ：誘導型肯定疑問文（ｐナイカ）

e.g.ここの餃子，そこそこおいしくありませんか？

Ⅱｂ：誘導型否定疑問文（～ｐナイカ）

e.g.ここの餃子，そんなにおいしくないんじゃありませんか？

以下で直接議論の対象とするのは，単純肯定疑問文「ｐカ」，単純否定疑問文「～ｐカ」，及び誘導型肯定疑問文「ｐナイカ」である。（誘導型否定疑問文については，基本的には誘導型肯定疑問文に準じて考えればよい。）以下では特にことわらないかぎり，「誘導型疑問文」という場合は誘導型肯定疑問文「ｐナイカ」をさすものとする。

2. 誘導型疑問文に関する議論のポイント

2.1. 誘導型疑問文の意味の二面性

誘導型疑問文の意味の重要な特徴はその二面性にある。誘導型疑問文の意味に関して正反対ともとれる説明がなされることがあるのも，その二面性の反映である。

例えば，森田（1989）は，

(7) a. （君は）加藤さんじゃないか？

b. お前にはちょっと難しくないかい？

のような誘導型疑問文を「確認」（同意を求める形式）とし，次のように述べている。

「（君は）加藤さんじゃないか」は「加藤さんでしょう」と実質的には等意であるが，「……じゃないか」を用いると，“自己の予想を聞き手にも同意させ確認する”という意識になる。「……でしょう」のような強圧的に自己の予想を押しつける推定質問とは意識が異なる。（p.830）

この説明は，（7）のような誘導型疑問文が確認要求の「ダロウ」に近い働きを持つ（安達1992）ことをとらえたものである[3]。「肯定の答えを予想する」「肯定の傾きを有する」という説明も実質的には同じ内容であると見られる。

誘導型疑問文のひとつである「pノデハナイカ」は，安達（1992）が指摘するように，聞き手に情報提供を求めるという通常の疑問文の性質に反して，聞き手に情報を提供する文（情報提供文）として機能することがあるが，このことも，誘導型疑問文が「話し手の（略）予想や期待を相手に対しても認めさせる」（森田1989）という側面を持つことの反映と見られる。

(8) 甲「山田さん，来るのかな？」

乙「来ないんじゃない？」

甲「そうですか。じゃあ，電話しないといけないな。」

（安達1992：p.52）

これに対し，田野村（1991）は，誘導型疑問文（非分析的な否定疑問文）

について次のように述べている。

話し手は，自分の見込みとは逆の命題を用いて尋ねることで，その見込みに対する自信のなさなり，自分の考えを積極的に提示することについての遠慮なりを表現しているものと思われる。（田野村1991：p.120）

つまり，「pである」という話し手の見込みが間違っている可能性を考慮に入れた疑問は，直接その見込みの真偽を問題にするのではなく，見込みとは逆の命題～p（田野村のいう「見せかけの見込み」）の真偽を問題にするという形をとる，それが誘導型疑問文（非分析的な否定疑問文）である，というわけである[4]。

田野村によれば，

(9) a．（電話をかけた時の最初の発話として）

??もしもし，○○さんではありませんか？

b．（路上で出会った人に）

失礼ですが，○○さんではありませんか？

に見られる自然さの違いは，「路上の場合は，話し手の見込みが違うかも知れないという気持ちが強いのに対し，電話の場合はそのようなことがない」ことから生ずるとされる。実際，「○○さんではありませんか？」が単純肯定疑問文

(10) ○○さんですか？

に比べて「慎重な物言い」（山口1990）という印象を与えるということは認めてよいだろう。

このように，誘導型疑問文には，(i)「自己の予想を聞き手にも同意させて確認する」という側面（〈押し〉の側面）と，(ii)「話し手の見込みが違うかもしれないという気持ちがある」という側面（〈引き〉の側面）が認められる。（筆者のいう「当該の可能性への誘導」は〈押し〉の側面をとらえたものである。）

このような二面性は，次のような提案（勧誘）・依頼を表す誘導型疑問文にも観察される。

(11) a. 暑いですね。ビールでも飲んでいきませんか？

b. この仕事を手伝ってもらえませんか？

この種の誘導型疑問文は，

(12) a. 暑いですね。ビールでも飲んでいきますか？

b. この仕事を手伝ってもらえますか？

のような単純肯定疑問文に比べて（単に丁寧というよりは）「話し手が下手に出ている」という印象を受けるが，このことも「話し手の見込みや期待を聞き手におしつけることを回避する」という形で説明されることがある。

例えば，Shibatani (1972) は次のように述べている。

> To use the negative form is more polite in making a suggestion or request because the speaker is not implying the positive assumption about his suggestion or request; it is not polite to imply the speaker's positive assumption about the suggestion or request he makes, because the effect of such an assumption obligates the addressee to follow the suggestion or accept the request.

つまり，単純肯定疑問文を用いた提案や依頼は，話し手の側に肯定の見込み（assumption）があるという含みがあり，その結果聞き手に提案や依頼を承諾するようおしつけるという意味あいが生じるが，否定形を用いた疑問文は話し手の側に肯定の見込みがあるという含みを持たず，それゆえ「おしつけ」の意味あいも回避される，というわけである[5]。

しかし，誘導型疑問文(11)にはもうひとつ重要な側面がある。それは，「飲んでいきたい（飲んでいってほしい）」「手伝ってほしい」という話し手の願望が単純肯定疑問文(12)よりもむしろ前面に出る，ということである。（「肯定の答えを予想する」という説明もこの点をとらえようとしているものと見られる。）事実，「お願いですから」などの説得・嘆願を表す表現とより自然に共起するのは誘導型疑問文の方である。

(13) a.　お願いですから，この仕事を手伝ってもらえませんか？

b. ?お願いですから，この仕事を手伝ってもらえますか？

つまり，提案（勧誘）・依頼を表す誘導型疑問文も，「話し手の願望が前面に出る」という〈押し〉の側面と「話し手が下手に出ている」という〈引き〉の側面を有するわけである。

誘導型疑問文の意味・機能に関する説明は，この〈押し〉と〈引き〉という二面性を何らかの形でとらえたものでなければならない。しかるに，従来の説明は〈押し〉と〈引き〉のいずれか一方に焦点があててなされることが多く，誘導型疑問文の意味に関する我々の直感が十分に反映されていないきらいがある。

2.2.　単純疑問文の意味記述との関係

誘導型疑問文の意味・機能は単純疑問文との比較で論じられることが多い。しかし，上で述べたように，従来の説明においては誘導型疑問文が持つ〈押し〉と〈引き〉の側面のいずれか一方に焦点があてられることが多く，誘導型疑問文に関する説明としては妥当なところがあっても，その説明が単純疑問文を含む命題疑問文全体の中でどのように位置づけられるかという点については，必ずしもはっきりしないことが多い。

例えば，大西（1989）は，

(14) a.　さっき，道で松木ポリスに逢わなかったかね。

（井伏鱒二「本日休診」）

b.　さっき，道で松木ポリスに逢ったかね。

という二つの文について，次のような説明をおこなっている。

> 肯定疑問文は話し手が肯定の事態を推測しているということを前面に押し出しながらその真偽を問いかけるため，聞き手に強引さ厚かましさを感じさせる。（略）聞き手に不快感を与えないよう，あたかも否定の事態を推測しているかのように否定疑問文を用いて問いかけるのだろう。
>
> （大西1989：p.110）

この説明は，基本的に，誘導型疑問文の〈引き〉の側面，すなわち「話し手の見込みを聞き手におしつけない」あるいは「話し手の見込みが間違っている可能性を考慮する」という側面に焦点をあてた説明である[6]。そして，単純肯定疑問文については，誘導型疑問文の〈引き〉の側面と対比させる形で，「肯定の見込みのおしつけ」あるいは「肯定の見込みに対する自信」という側面に焦点があてられている。

しかし，この種の説明においては，通常，単純肯定疑問文が有するとされる「肯定の見込みのおしつけ」というニュアンスと，誘導型疑問文が有する「～ダロウ？」に近い確認要求的な意味あい（ここでいう〈押し〉の側面）との違いについては言及されない。

同じことは，提案（勧誘）・依頼を表す誘導型疑問文に関する説明についてもあてはまる。つまり，「単純肯定疑問文は話し手の肯定の見込みや期待を聞き手におしつけるという印象を与えるが，誘導型疑問文ではそれが回避される」という趣旨の説明においては，誘導型疑問文の方が単純肯定疑問文よりも話し手の願望が前面に出るということは説明の対象とされない。

「肯定の答えを予想する」「肯定の傾きを有する」といった，誘導型疑問文の〈押し〉の部分に焦点をあてた説明においても，事情はさほどかわらない。

例えば，仁田（1991：p.149）は，

(15) この山，昆虫がいっぱい，いそうだと思いません？

（笹沢左保「死んだ甲虫」）

のような誘導型疑問文を「いそうだと思うでしょう」という「肯定の傾きを有する」文とするが，その「肯定の傾き」は，

(16) こんな山に，昆虫がいっぱい，いそうだと思います？　［いそうだと思わないでしょう］

のような単純肯定疑問文が有する「否定の傾き」に対応するものとして位置づけられている。しかし，筆者が見るところ，(16)が有する「否定の傾き」と(15)が有するとされる「肯定の傾き」との間には厳密な意味での対応関係

は成立しない。（少なくとも，単に対応関係があるとするだけでは意味がない。）

（16）における「否定の傾き」とは，基本的に「肯定命題ｐの真偽を問題にする背景には否定命題～ｐの可能性も否定できないという気持ちがあり，文脈によってはその気持ちが前面に出る」ということである。（「反語」というのも基本的にはそういうことである。この場合は否定の方向への反語。）そして，そのことは，

(17) 妻：私と結婚して幸せ？
　　夫：もちろん幸せだよ。
　　妻：（疑い深そうに）本当に幸せ？

のように，先行文脈で導入された命題ｐに対する疑念を表明する単純疑問文においては特に顕著である（後述）。

このような意味での「否定の傾き」に対応する「肯定の傾き」（いわば肯定の方向への反語）とは，「否定命題～ｐの真偽を問題にする背景には肯定命題ｐの可能性も否定できないという気持ちがあり，文脈によってはその気持ちが前面に出る」ということである。そして，この意味での「肯定の傾き」を有するのは，(18a)のような先行文脈で導入された～ｐに対する疑念を表明する単純否定疑問文であり，これと(18b)や(15)のような確認要求的な意味を含む誘導型疑問文を単純に同一視することは適切ではない。

(18) 妻：私と結婚したことを後悔してる？
　　夫：後悔なんかしてないよ。
　　妻：　ａ．（疑い深そうに）本当に後悔してない？
　　（単純否定疑問文）
　　ｂ．（疑い深そうに）口ではそんなこと言って，本当は後悔してない？／後悔してるんじゃない？（誘導型疑問文）

つまり，「肯定の傾き」というだけでは誘導型疑問文の意味を記述したことにはならない。さらにいえば，「傾き」による説明においては，誘導型疑問文と単純否定疑問文はごく基本的なレベルでは同義であるということも明

確な形では主張されず，結果的に，両者の意味の違いをどのように評価するかということに関する立場がはっきりしない。（同じことは，誘導型疑問文を一種の反語表現と見る立場についてもあてはまる。）

このように，従来の説明では，誘導型疑問文と単純疑問文の意味の違いを十分に記述・説明することができない。そして，その原因の大半は，誘導型疑問文の意味の説明が〈押し〉と〈引き〉のいずれかの側面だけに焦点があてる形でなされているために，単純疑問文の意味の説明もそれに呼応する形で一面的なものになりがちだということにある。誘導型疑問文だけでなく，単純疑問文の意味について考える場合も，「命題疑問文」全体の中での位置づけということを常に考慮に入れる必要があるのである。

(i)誘導型疑問文が有する二面性を何らかの形でとらえる，(ii)単純疑問文を含めた命題疑問文全体の中での位置づけを常に念頭におく，という二点が誘導型疑問文の意味・機能について考える際の重要なポイントである。以下，このポイントをふまえて，本敲の主題である誘導型疑問文の意味について議論をおこなう。

3. 単純疑問文と誘導型疑問文

3.1. 単純肯定疑問文の意味

誘導型疑問文の意味は（従来もそうされてきたように）単純肯定疑問文との比較で考えるのがよい。そこで，本節では単純肯定疑問文の意味について簡単にまとめておくことにする。

まず，次の例を見られたい。

(19)（腰をかがめて何か探している聞き手に）

どうしました？　何か落としましたか？

発話場面において成立している文脈をC（この場合「聞き手が腰をかがめて何か探している」），また，真偽が問題にされている命題（この場合「聞き手が何か落とした」）をpで表す。この場合，単純肯定疑問文(19)を発する話し手が想定していることは次のようにまとめられる。

(20) 文脈Cにおいては「pか～pかである」ことは確かである。すなわち，pである可能性があることは確かだが，pでない可能性がある（否定できない）ことも確かである。

別の言い方をすれば，「pと仮定しても～pと仮定しても文脈Cと矛盾は生じない」ということである。（事実，もともと地面にあるものをさがすようなケースでは，何も落としてなくても同じ状況が成立する。）単純肯定疑問文(19)は，このような想定にもとづいて文脈Cに選言命題「p ∨～p」（いわゆる排中律）を導入し，そのうちのpの可能性に言及してその真偽を問題にすることを表す[7]。

このことを仮に次のように表そう。（「p（∨～p）」は，直接真偽が問題にされているのが（～pではなく）pであることを示す。）

(21) C：ϕ

↓

C：p ∨～p

↓

C：p（∨～p）　（問題導入）

単純肯定疑問文が「肯定の見込みに対する自信」「肯定の見込み・期待のおしつけ」というニュアンスを持つというのも，(i)「pである可能性があることは確かである」という想定のもとで発されることと，(ii)直接真偽が問題にされているのが肯定命題pである，という二つのことからくる。（ただし，単純肯定疑問文には「～pである可能性が否定できないことも確かである」というニュアンスもあるのであり，「肯定の見込みに対する自信」「肯定の見込み・期待のおしつけ」ということを過大評価すべきではない。）

また，次の例を見よう。

(22) さっきは何も落としていないとおっしゃっていましたが，ひょっとして本当は何か落とされましたか？

この場合，話し手は，先行文脈で与えられた～pという情報は当該の発話場面においては無効らしいとしてキャンセルし，新たに「文脈Cにおいてp

の可能性があることは確かである」と想定しなおして，ｐの真偽を問題にしている。

(23)　C：～p　　（既成情報）
↓キャンセル
C：φ
↓
C：p ∨～p
↓
C：p（∨～p）　（問題導入）

単純肯定疑問文でも，次のような場合は多少事情が異なる。

(24)（なかなか落としたものがみつからない）
甲：本当に何か落としましたか？
乙：そういうあなたこそ，ちゃんと探してますか？

この場合，話し手は，先行文脈で導入ずみの，あるいは「この場面ではこうであるべきだ」とされている「ｐである」を，～ｐの可能性も否定できないとして，いったん「ｐの可能性があることは確かである」に格下げし，再度ｐの真偽を問題にしている。

(25)　C：p　　（既成情報）
↓格下げ
C：p ∨～p
↓
C：p（∨～p）　（問題導入）

疑い深そうに，あるいは非難がましく問いかける場合は，「～ｐである可能性は否定できない」という気持ちが前面に出るが，これがいわゆる「否定の傾き」にあたる。

以上のことは次のような形にまとめることができるだろう。

(26)　単純肯定疑問文「ｐカ」は，「当該の文脈Ｃにおいてｐである可能性はまだ排除されていない」という想定のもとでｐの真偽を問題に

する疑問文である。

別の言い方をすれば，「当該の文脈Cにおいて真でありうる選択肢の集合にpが含まれている」という想定のもとで，文脈Cに「p∨～p」という選言命題をストレートに追加してpの真偽を問題にするのが，単純肯定疑問文なのである。

単純否定疑問文，例えば，

(27) 何も落としませんでしたか？

についても，真偽が問題にされるのが否定命題～pであるというだけで，基本的には単純肯定疑問文と同じである。つまり，単純否定疑問文は，「～pの可能性があることは確かだが，pの可能性が否定できないことも確かである」として文脈Cに「～p∨p」という選言命題をストレートに追加し，～pの真偽を問題にする疑問文である（後述）。

3.2. 誘導型疑問文の意味

前節での議論をふまえ，次に「単純疑問文との役割分担」という観点から誘導型疑問文の意味について考える。まず，次の例を見られたい。

(28) 甲：ここのキムチ，辛いですか？

乙：いや，全然辛くないですよ。

甲：（疑い深そうに）

a. 本当に［辛くない］(ん)ですか？（単純否定疑問文）

b. ??本当は［辛くない］(ん)ですか？[8]（　〃　）

c. 本当ですか？　本当は［辛く］ありませんか？

（誘導型肯定疑問文）

d. ??本当ですか？　本当は［辛い］ですか？

（単純肯定疑問文）

単純否定疑問文(28b)と誘導型肯定疑問文(28c)に見られる「本当は」の共起に関する自然さの違いは，単純否定疑問文と誘導型疑問文が異なる意味をになうことを示している。つまり，「辛くない」ことの真偽を問

題にすることと「辛い」可能性をもちかけて誘導することとは一応区別すべきことがらだということである（後述）。

また，誘導型肯定疑問文(28c)と単純肯定疑問文(28d)との自然さの違いは，ｐの可能性が排除された文脈（この場合，聞き手が「辛くない」と言った文脈）では単純肯定疑問文「ｐカ」を用いてｐの真偽を問題にすることができないことを示している。念のため，～ｐの可能性が排除された文脈では単純否定疑問文「～ｐカ」を用いて～ｐの真偽を問題にすることができないことも確認しておこう。

(29) 甲：ここのキムチ，辛いですか？

乙：ええ，かなり辛いですよ。

甲：　a．本当に［辛い］(ん)ですか？　（単純肯定疑問文）

b．本当ですか？　本当は［辛くない］んじゃありませんか？　（誘導型否定疑問文）

c．??本当ですか？　本当は［辛くない］ですか？　（単純否定疑問文）

以上のことは次のことを示唆する。

(30) 誘導型疑問文は単純疑問文の機能上のギャップをうめるための疑問文である。すなわち，誘導型疑問文「ｐ（～ｐ）ナイカ」は，「当該の文脈Ｃにおいてｐ（～ｐ）の可能性が排除されている」（当該の文脈Ｃにおいて真でありうる選択肢の集合にｐ（～ｐ）が含まれていない）という想定のもとで，単純疑問文とは異なる手続きでｐ（～ｐ）の真偽を問題にするための疑問文である。

このことをもう少し具体的に見ていこう。

(31)（何か落したことに気づかずに歩いていく聞き手に，そのことを教えようとして）

もしもし，何か落としませんでしたか？

cf. ??何か落としましたか？

(31)を発する話し手の念頭にあることは次のようにまとめられよう。

(32) 聞き手の行動様式は「何か落とした」人のそれではない。（つまり，聞き手の行動様式においては「何か落とした」可能性は排除されている。）しかるに，聞き手が何か落とすのを見た話し手としては「聞き手は何か落とした」とせざるをえない。

また，

(33) （目の前の人が何か落したのを見たが，当人は何事もなかったようにそのまま歩いていく）

あれ，あの人，（確か）今何か落とさなかったか？

cf. ??あれ，あの人，今何か落としたか？

の場合も，（問いかけであれひとりごと（心内発話）であれ）次のようなことを念頭において発されるものと思われる。

(34) 「何か落とした」ならば「落としたことに対して何らかの形で対処する」はずである。しかるに，「あの人」は「落としたことに対して何の対処もしない」。したがって，話し手の認識以外のところでは「あの人は何も落とさなかった」ということになっている。しかし，「あの人」が何か落とすのを見たと思っている話し手としては「あの人は何か落とした」とせざるをえない。

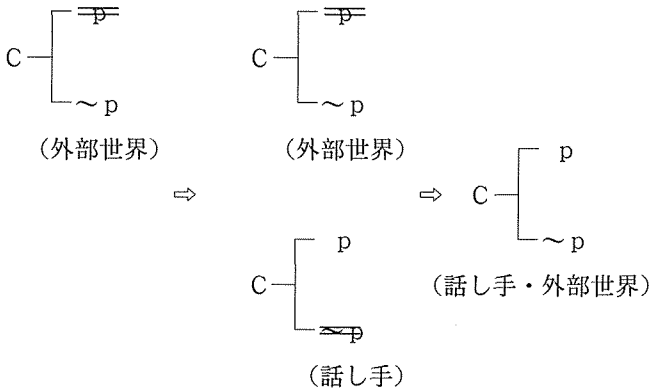
(32)及び(34)の内容を一般化するとすれば，次のようになるだろう。

(35) 外界の状況や先行文脈における話の流れといった，「発話場面における話し手の認識や信念以外の世界」（仮に「外部世界」と呼ぶ）では「当該の文脈Cにおいてはpでない」ということになっている（pの可能性が排除されている）と想定されるが，「発話場面における話し手」としては「文脈Cにおいてはpである」とせざるをえない。

これは「同一の文脈Cに矛盾する二つの結論～p・pが存在する」という矛盾状態としてとらえることができる。そして，誘導型疑問文(31)(33)を発する話し手としては，このような矛盾状態が発生したという想定のもとで，（i）外部世界で排除されているpの可能性を導入し，(ii)話し手が排除し

ている～pの可能性を受け入れるという調整をおこなって「p ∨～p」を話し手と外部世界とで共有できる形にし，その上でpの真偽を問題にしようとしている，と考えられる。「p ∨～p」を文脈に導入する際に一定の調整手続きが必要である点が，「p ∨～p」をストレートに文脈に導入する単純疑問文と大きく異なる点である。

(36)



疑問文の発話にあたっては，話し手は当該の文脈の状態を参照し，その結果をふまえて文脈に「p ∨～p」を導入する際の手続きをかえる，そしてそれが単純疑問文と誘導型疑問文という違いとして具現化される，というのが本敲における基本的なアイディアである。ここでは，誘導型疑問文が発される手続きを次のような形にまとめてみよう。

(37)　C：～p　　（外部世界）

↓

C：～p ∧ p　　（話し手側のp導入）（＝～（p ∨～p））

↓否定

C：p ∨～p

↓

C：p（∨～p）　　（問題導入）

つまり，単純肯定疑問文が「当該の文脈Cにおいてはpの可能性はまだ排除されていない」という想定のもとに，文脈にストレートに「（p ∨～p）

である」を導入してｐの真偽を問題にすることを表すのに対し，誘導型疑問文「ｐナイカ」は，「～ｐ∧ｐ」すなわち「（ｐ∨～ｐ）でない」という矛盾状態をいったん設定し，その状態を否定する（いわゆる矛盾律を適用する）という形で文脈Ｃに「ｐ∨～ｐ」を導入してｐの真偽を問題にすることを表す，と考えるわけである。単純疑問文を「排中律依存の命題疑問文」として位置づけるとすれば，誘導型疑問文は「矛盾律依存の命題疑問文」ということになろう[9]。誘導型疑問文における「ナイ」も，矛盾律に依存する形で文脈に「ｐ∨～ｐ」を導入することを表す標識であると考える[10]。

2.1.で述べた誘導型疑問文の意味の二面性も，(i)「外部世界においてはｐの可能性が排除されている」という想定(配慮)のもと(〈引き〉の側面)，(ii)「ｐ∨～ｐ」を共有するために外部世界で排除されているｐの可能性を導入する（〈押し〉の側面）ことから生ずる。((ii)は，単純肯定疑問文における「肯定の見込みに対する自信」「肯定の見込み・期待のおしつけ」，すなわちｐである可能性が排除されていない文脈で「ｐである可能性があることは確かである」とすることは異なることに注意されたい。)

このようにとらえると，単純肯定疑問文と単純否定疑問文は並列させて選択疑問文にすることが可能だが，誘導型肯定疑問文と誘導型否定疑問文は並列させることができない，ということも自然に説明できる。

(38) a．何か落としましたか？　それとも，何も落とさなかったですか？

b．??何か落としませんでしたか？　それとも，何も落とさなかったんじゃありませんか？

単純肯定疑問文と単純否定疑問文は，それぞれ「ｐ∨～ｐ」「～ｐ∨ｐ」という選言命題が文脈にストレートに追加可能である，という想定のもとで発されるが，この場合，それぞれの想定が矛盾することはない。（ｐ∨～ｐ＝～ｐ∨ｐだから。）一方，誘導型肯定疑問文と誘導型否定疑問文の発話の際に想定されているのは，それぞれ「外部世界では～ｐだが話し手側ではｐだ」「外部世界ではｐだが話し手側では～ｐだ」という互いに矛盾するこ

とがらである。誘導型肯定疑問文と誘導型否定疑問文を並列させることができないのも，矛盾する想定を同時にふまえることになるからである。

以上のことをふまえて，2. であげた例についてもう一度検討しよう。

まず，路上で出会った人に「失礼ですが，○○さんではありませんか？」（＝9b）と問う場合，話し手が想定しているのは自分の「見込みが違うかも知れない」（田野村1991）というよりは，

(39) 「こんなところで○○に会うとは思えない」あるいは「聞き手の外見が自分が知っている○○とは異なる」という点からすれば，本来「聞き手が○○である」はずはない。しかし，この場では，話し手としては「聞き手は○○である」と判断せざるをえない。

ということであろう。

(40) ひょっとして，あの人，○○じゃないかなあ。

のようなひとりごとの場合も基本的には同じである。（「本来…であることになっている」「本来…であるはずだ」といった話し手の既成知識も，「発話場面における話し手」にとっては「外部世界」扱いされると考えておこう。）

電話をかけた時に「??もしもし，○○さんではありませんか？」（＝9a）と言えないのも，聞き手が何も話していない段階では「聞き手は○○でないとしているが，話し手としては聞き手は○○であると判断せざるをえない」とする余地がないからである。（話をしていて「聞き手は××である（＝○○でない）として話しているが本当は○○だ」と判断したという状況では，「本当は○○さんじゃありませんか？」と問うことが可能。）

「さっき，道で松木ポリスに逢わなかったかね」（＝14a）も，「逢った」という話し手の見込みを聞き手におしつけない，あるいはその見込みが間違っている可能性を考慮しているというよりは，

(41) 聞き手の行動様式は「さっき道で松木ポリスに逢った」というものではない（あるいは，聞き手は実際には逢っていてもそのことを特に意識しているように見えない）が，話し手としては「さっきあの道を通ったからには，聞き手は松木ポリスに逢った」と判断せざる

をえない。

という想定をふまえているという方が直感と合致するように思われる。

「ビールでも飲んでいきませんか？」(＝11a)，「この仕事を手伝ってもらえませんか？」(＝11b)のような提案（勧誘）・依頼を表す誘導型疑問文において話し手の願望が前面に出るというのも，このタイプの疑問文が意味するのが，

(42) 聞き手の意向のレベルで「飲んでいく／手伝う」可能性が排除されている（否定的・消極的である，遠慮がある），あるいはその人の意識に「飲んでいく／手伝う」ということがない。しかし，話し手としては「飲んでいきたい（いってもらいたい）／手伝ってもらいたい」。

という想定のもとで（実際にそうであるかどうかはまた別の問題），聞き手の意向を「飲んでいく／手伝う」方向に転じさせようとする「説得」であるということにほかならない[11]。また，「話し手が下手に出ている」というニュアンスがあるのも，誘導型疑問文を用いることにより，聞き手の否定的・消極的な意向，あるいは聞き手の側で行為を実行する心の準備ができていないことに対する配慮があることを明示することになるからである[12]。

このタイプの誘導型疑問文における「説得」のニュアンスは，実際に聞き手が当該の行為をおこなうことを拒否した文脈ではより明確である。

(43) 甲：暑いですね。ビールでも飲んでいきませんか？
乙：原稿のしめきりが近いんで，今日はやめておきます。
甲：そんなこと言わずに，少し飲んでいきませんか？

これに対し，単純肯定疑問文は「ｐの可能性があることは確かである」という想定のもとで発されるため，場合によっては，聞き手の意向を無視した図々しい質問という印象を与えることがある。

(44) 甲：今，時間ありますか？
乙：ありますよ。

甲：　a．じゃ，この仕事手伝ってくれますか？

　　b．じゃ，この仕事手伝ってくれませんか？

ただ，単純肯定疑問文の場合，誘導型疑問文ほどは話し手の願望が前面に出ず，その意味では聞き手に選択の余地を与えているともいえる[13]。

3.3.　誘導型疑問文と単純否定疑問文

前節でも述べたように，本稿では，誘導型疑問文「ｐナイカ」における「ナイ」は，否定命題を構成するのではなく，ｐの真偽を問題にする手続きが単純疑問文とは異なることを表す標識であると考える。つまり，単純否定疑問文「～ｐカ」と誘導型疑問文「ｐナイカ」はまずは明確に区別すべきであり，誘導型疑問文を「ｐであるという見込みとは逆の命題～ｐの真偽を問題にする」あるいは「あたかも否定の事態を推測しているかのように問いかける」疑問文とするのは適切ではない，と考えるわけである。

単純否定疑問文「～ｐカ」は「ｐの可能性も否定できないとして～ｐの真偽を問題にする」疑問文であり，誘導型疑問文「ｐナイカ」は「外部世界で排除されているｐの可能性を導入した上でｐの真偽を問題にする」疑問文である。誘導型疑問文「ｐナイカ」がｐの真偽を問題にしていることは，誘導型疑問文を受けて用いられる代用形が，単純肯定疑問文「ｐカ」の場合と同じくｐを代用する（中右1988）ことにも反映される[14]。（しばしば問題にされる誘導型疑問文に対する肯定応答辞・否定応答辞の使い方についても，基本的には同じ線で考えることができる。）

(45)　a．甲：ここの餃子，［おいしい］ですか？

　　乙：ええ，［そう］思いますね。　　（単純肯定疑問文）

　　b．甲：ここの餃子，［そこそこおいしくあり］ませんか？

　　乙：ええ，私も［そう］思いますね。　　（誘導型疑問文）

　　c．甲：ここの餃子，［おいしくない］（＝まずい）ですか？

　　乙：ええ，［そう］思いますね。　　（単純否定疑問文）

また，単純否定疑問文「～ｐカ」と誘導型疑問文「ｐナイカ」は，発され

る文脈は似ているが，やはり意味は異なると考えられる。

(46)（おいしそうな表情を全くしない聞き手に）

a．　ここの餃子，おいしくない（＝まずい）ですか？

b．　ここの餃子，そこそこおいしくありませんか？

(47)　妻：私と結婚したことを後悔してる？

夫：後悔なんかしてないよ。

妻：　a．（疑い深そうに）本当に後悔してない？

b．（疑い深そうに）口ではそんなこと言って，本当は後悔してない？／後悔してるんじゃない？　（＝18）

単純否定疑問文(46a)の場合，話し手自身が「ここの餃子はおいしくない（～p）可能性がある」とする一方で「おいしい（p）可能性も否定できない」として，否定命題「おいしくない」の真偽を問題にしている。「おいしくない」と仮定しても「おいしい」と仮定しても「聞き手がおいしそうな表情をしない」こととは矛盾しない，というわけである。

(48)　C：ϕ

↓

C：～p ∨ p

↓

C：～p（∨p）　（問題導入）

また，(47a)の場合は，先行文脈で導入された「後悔していない」（～p）を，「後悔している」可能性も否定できないとして，いったん「～pの可能性があることは確かである」に格下げし，再度～pの真偽を確認している。

(49)　C：～p　（既成情報）

↓格下げ

C：～p ∨ p

↓

C：～p（∨p）　（問題導入）

これに対し，誘導型疑問文(46b)(47b)においては，「聞き手はここの餃

子がおいしいと思っているようには見えない／聞き手は後悔していないと言っている」が，話し手としては「ここの餃子はそこそこおいしい／聞き手は後悔している」（p）と判断するとして，排除されているpの可能性を導入し，その真偽を問題にしている（図は㊲を参照）[15]。(46a)(47a)のように文脈に残っている～pの真偽を問題にするのではなく，文脈からいったん排除されたpの真偽を問題にする，というのがポイントである。

㊿　a．　約束したとおり［お酒は飲んでいません］か？

（単純否定疑問文）

b．　約束に反して［お酒を飲んでい］ませんか？

（誘導型疑問文）

単純否定疑問文(50a)においては，「お酒は飲まない」ことを約束した人がその約束をちゃんと守っているかどうかを問題にしている。すなわち，話し手としては，「（約束どおり）お酒を飲んでいない」可能性があることは確かであるとする一方で，「（約束に反して）お酒を飲んでいる」可能性も否定できない，としているわけである。

一方，誘導型疑問文(50b)においては，約束では「お酒を飲む」ことは本来あってはならない（可能性が排除されている）ことがらであるが，話し手としては「（約束に反して）お酒を飲んでいる」と判断せざるをえないとして，排除されている「お酒を飲んでいる」可能性を導入し，その真偽を問題にしている。

51　a．　［本当は何も飲みたくない］ですか？　（単純否定疑問文）

b．　［本当はもう少し飲みたく］ありませんか？（誘導型疑問文）

52　a．　［やっぱりそんなに辛くない］ですか？　（単純否定疑問文）

b．　［やっぱり少し辛く］ありませんか？　（誘導型疑問文）

(51a)の場合，先行文脈で与えられた「聞き手は飲みたい」という情報は当該の発話場面においては無効らしいとしてキャンセルし，新たに「本当は聞き手はもう飲みたくない可能性がある」と想定しなおして，その真偽を問題にしている。一方，(51b)の場合は，聞き手は「飲みたくない」ようにふ

るまっているが，話し手としては「本当は聞き手はもう少し飲みたい」と判断せざるをえないとし，外部世界で排除されている「もう少し飲みたい」可能性を導入し，その真偽を問題にしようとしている。

また，(52a)は，先行文脈で「辛くない」とした聞き手に「（発話時においても）やっぱり辛くない」か否かを問題にする文である。一方，(52b)は，先行文脈において聞き手に「辛い」という見解がしりぞけられたことに対して，話し手自身は「やっぱり辛い」と思うとして，排除された「辛い」可能性を導入し，その真偽を問題にする文である。

このように，誘導型疑問文と単純否定疑問文は基本的な意味が異なる。誘導型疑問文を「話し手の見込み（期待）とは逆の命題の真偽を問題にする」疑問文とする立場においては，おそらく，誘導型疑問文の「外部世界で排除されているｐの可能性を導入し，ｐの真偽を問題にする」という意味は「～ｐの真偽を問題にする」ことから語用論的に派生されると考えられているのであろう。しかし，そのプロセス自体は必ずしもはっきりとした形では示されていない[16]。（誘導型疑問文を「肯定の傾き」を有する一種の反語表現と見る立場についても同じことがあてはまる。）

筆者自身は，まずは，単純疑問文「ｐカ」の「ｐの可能性が排除されている文脈でｐの真偽を問題にすることができない」（3.2.参照）という機能上のギャップをうめるために，ｐの可能性が排除されている文脈で用いることができる「…ナイカ」の形式の疑問文に「ｐの可能性が排除されている文脈でｐの真偽を問題にする」という機能が託された，という方向で考えたいと思っている[17]。

4.　「ｐの可能性の排除」のあり方

以上，誘導型疑問文の基本的な意味について見てきたが，次に誘導型疑問文を発する際の前提である「ｐの可能性の排除」のあり方について大まかに見ていくことにする。

Ｉ：「ｐである」可能性が実際に直接的・間接的に否定されたケース

この場合，それまでの見方をかえてｐの可能性を再検討する，というニュアンスが生ずる。

(53)（望遠鏡をのぞいている乙に）

甲：赤い星は見えますか？

乙：何も見えませんけど。

甲：おかしいなあ。もう一回よく見てくださいよ。まんなかあたりに赤い星が見えませんか？

(54)　姉：私，小林先生と結婚することにしたわ。

妹：あれ，お姉ちゃん，竜太先生と結婚したいって言ってなかった？

(55)（３時にやってきた乙を甲が非難して）

甲：遅いじゃないか。

乙：え？　確か３時に集合じゃなかったですか？

(54)の場合，話し手である妹は，「竜太先生と結婚したいと言っていた」（ｐ）はずの姉がそれを否定するような発言をしたことに対して異議を申し立て，姉にｐの可能性を再検討するよう要求している。

また，(55)の場合は，自分とは異なる集合時間を想定している聞き手に対して，「３時に集合だったはずである」として，聞き手にその可能性を受け入れさせ，それまでの見方をかえて「３時に集合」という可能性を再検討するよう求めている。

(56)（姉が「小林先生と結婚することにした」と言っているのを聞いて）

あれ？　お姉ちゃん，確か竜太先生と結婚したいって言ってなかったかなあ。

(57)（３時に集合場所にいったが，誰もいない）

あれ？　確か３時に集合じゃなかったかなあ。

のようなひとりごとの場合も，外部世界で「竜太先生と結婚したいと言っていた」「３時に集合」という可能性が排除されていることを受けて発される文であることにはかわりはない。

Ⅱ：「ｐである」可能性が意識されていない（知らない，忘れている，特に重要なこととして意識されていない）という想定にたつケース

次のような例がそれにあたる。

(58)（医大生のルイ，村上の足がひどくはれあがっているのを見て）

ルイ：やだ！　どうしたの，その足!!

村上：ちょっと歩きすぎたらしくてね，親指のつけ根がはれちゃったんだ。

ルイ：おじさん，それひょっとして痛風じゃないの？

cf.??おじさん，それひょっとして痛風？

（鈴木吉彦『痛風：激痛は解消できる』主婦の友社）

「足の親指のつけ根がはれあがる」というのは痛風の典型的な症状であり，医大生のルイは「これは痛風であるはずだ」と思っている。しかし，「歩きすぎたらしい」という発言から推論されるのは，聞き手である村上は「自分が痛風である」とは思っていない，ということである。誘導型疑問文(58)は，そのような想定にもとづいて，村上の意識から排除されている「痛風である」可能性を導入し，その真偽を問題にしようとして発される文である。

(59)　ａ．ここに補助線をひいたら，もっと簡単にとけませんか？／とけるんじゃありませんか？

ｂ．ここに補助線をひいたら，もっと簡単にとけないかなあ／とけるんじゃないかなあ。

のような文も，それまでの段階で話し手以外の誰も（あるいは話し手自身も）「ここに補助線をひけばもっと簡単にとける」（ｐ）というアイディアを思いついていない，という文脈にｐの可能性をもちこむ際に発される文である。

また，

(60)　ａ．あなた，そんなに飲んで体をこわしませんか？

ｂ．あの人，あんなに飲んで体をこわさないかなあ。

は，当該の人物（(60a)の場合は聞き手）は「体をこわす」ということが意識にないような飲み方をしているが，話し手としては「体をこわす」とせざ

るをえない，として用いられる文である。

(61) 留守の間に何か連絡はありませんでしたか？

のような文も，「仮に連絡があったとしても，聞き手はそのことを特に意識しているようには見えない」ということを受けて発される文としてとらえることができよう。

Ⅲ：「本来ｐであってはならない（ｐであってほしくない）」「本来ｐとは考えにくい」場面であるが，発話時においては，それに反して「ｐである」と考えざるをえない（考えたい），というケース

例えば，電気製品の使用説明書には「トラブルの際のチェック項目」が列挙してあるが，その場合，誘導型疑問文「ｐナイカ」は「本来そうあってはならない」（～ｐであるべき）ことがらについて，また単純肯定疑問文「ｐカ」は「本来そうでなければならない」ことがらについて用いられる（田野村1991）。

(62) 録画できない：テープのツメが折れていませんか？
テープは入っていますか？
テープが終わりになっていませんか？[18]
（三菱ビデオＨＶ－Ｆ５取扱説明書）

録画する場合は「テープのツメが折れている」「テープが終わりになっている」（ｐ）ことはあってはならない。その意味で，「録画する」場面においては本来ｐの可能性は排除されている。しかし，話し手としては，この場面においては「ｐである」と判断せざるをえないとして，誘導型疑問文を用いるわけである[19]。

(63) ａ．その計算，まちがっていませんか？／まちがっているんじゃありませんか？　もう一度計算してください。
ｂ．あれ？　ひょっとして，この計算，まちがってないかなあ／まちがっているんじゃないかなあ。

も，本来「計算がまちがっている」ということはあってはならないのだが，この場では「計算がまちがっている」と判断せざるをえない，として誘導型

疑問文が用いられていると考えられる[20]。（この場合，「計算がまちがっている」ことが聞き手，あるいは話し手のそれまでの意識にない，ということも関与している。）

(64)　（心配そうに）何か失礼なことはございませんでしたか？

のような例では，「本来失礼なことはあってはならないが，自分は未熟であるからきっと失礼なこともあったにちがいない」という気持ち（あるいはそのような対人的態度）を表すために誘導型疑問文が用いられると考える。

また，

(65)　a．この暑さ，何とかならないかなあ。　（田野村1991）

　　b．早く春にならないかなあ。　（田野村1988）

のような「願望」を表すタイプの場合，とても「暑さが何とかなる」「早く春になる」ような状況ではないが，話し手としては「暑さが何とかなってほしい」「早く春になってほしい」として，誘導型疑問文が用いられるのだと考えられる。

Ⅳ：聞き手が行為ｐを実行することに対して否定的・消極的だったり，遠慮があったりする（すなわち聞き手の意向のレベルでｐが排除されている）という想定にたつケース

このケースにおいては，誘導型疑問文は提案(勧誘)・依頼，すなわち聞き手の意向をかえようとする「説得」を表すが，これは「願望」を表すタイプの特殊なケースとしてとらえられよう。

(66)　甲：暑いですね。ビールでも飲んでいきませんか？

　　乙：原稿のしめきりが近いんで，今日はやめておきます。

　　甲：そんなこと言わずに，少し飲んでいきませんか？　（＝43）

　　cf.（心の中で）この人，ビールでも飲んでいかないかなあ？　（願望）

(67)　この仕事を手伝ってもらえませんか？　（＝11b）

　　cf.　あの人，この仕事を手伝ってくれないかなあ。（願望）

次のようなケースも考えられる。

Ⅴ：たとえ現実にはｐであっても，聞き手は「言いたくない／言うのを遠慮している／特に言う必要があるとは意識していない／まだ言うタイミングではないと思っている」などの理由で自分から「ｐである」と言うことはない，という想定にたつケース

例えば，

(68) ａ．何かご質問はありませんか？

ｂ．（ころんだ聞き手に）おけがはありませんか？

のような例は，聞き手は「質問がある」「けががある」としても自分からは遠慮して言わない，という想定にたった「促し」の発話である（(64)もそのような側面を持っている。）

また，

(69) ａ．（甲，相手の秘密を知っているという表情で）

甲：昨日の夜，若い女の人と手を組んで歩いていませんでしたか？

乙：何でそんなこと知っているんですか!?

ｂ．甲：あの皿は清代のものではありませんか？

乙：おや，よくご存じですね。

は，聞き手が隠しておきたい（したがって自分からは言わない），あるいは聞き手が特に言う必要があるとは意識していないと想定されることがらｐの可能性を導入し，その真偽を問題にしようとしている。

少々特殊なケースとして，

Ⅵ：聞き手がｐを実行することになっている場面でｐを実行しないことをふまえて発されるケースがある。「催促」を表す誘導型疑問文がこれにあたる。

(70) こら！　行かないか。　（田野村1988）

このタイプの誘導型疑問文は，その場で実行されねばならないｐが実行されないことに対する異議申し立てを表す。このタイプとⅣの「説得」を表すタイプとの違いは，基本的には，ｐの可能性が現実世界のレベルで排除され

ているか（催促），聞き手の意向のレベルで排除されているか（説得）という点にある。両者の違いは次のような文脈ではより明確にあらわれる[21]。

(71) 父：（ニンジンがきらいな娘に）このニンジンおいしいぞ。ちょっと食べないか？　（説得）

娘：いや。ニンジンきらい。

父：そんなこといわずに，少し食べないか？　食べないと背がのびないぞ。　（説得）

娘：（しぶしぶ）うん...。（しかし，なかなかニンジンを食べようとしない。）

父：こら，早く食べないか。　（催促）

同一の形式が文脈によって「説得」と「催促」の意味を持つということは，終助詞「よ↓」（低くおさえられて発音される「よ」）が付加され，「聞き手の意向や現実世界に存在する～pを話し手の意向pに合致するよう修正する」ことを要求する命令文・依頼文にも観察される（井上1993）。

(72) 母：ちょっとおつかいに行ってきてよ↓。　（説得）

子：いやだよ。

母：そんなこといわずに，行ってきてよ↓。　（説得）

子：わかったよ。行くよ。

（しかし，子供，なかなか買物に行こうとしない）

母：ちょっと，早く行ってきてよ↓。　（催促）

5.　固定的表現としての「pジャナイカ」

以上，誘導型疑問文が「外部世界で排除されているpの可能性を導入してその真偽を問題にする」疑問文であることを述べてきたが，この性質は，固定的表現としての「pジャナイカ」（田野村1988のいう「第一類の否定疑問文」）にも反映される。

「pジャナイカ」は，基本的に，pの可能性を排除している聞き手にそれまでの見方をかえて「pである」と認識・確認することを要求する，あるい

は，pの可能性を排除していた話し手がそれまでの見方をかえて「pである」と認識・確認することを表す。前者の場合は確認要求的なニュアンス，後者の場合は「驚き」のニュアンスが生ずる[22]。

例えば，蓮沼（1993）が「共通認識の喚起」と呼ぶ機能をになう「pジャナイカ」は，「pの可能性を聞き手が認識していない」という想定のもとで，聞き手にそれまでの見方をかえて「pである」ことを認識・確認するよう求める文としてとらえることができる。

(73)（タクシーの運転手に）

あそこに郵便局が見えるじゃない。あの角で曲がってちょうだい。

（蓮沼1993）

(74) 貞九郎：［ベッドで寝ているのは］高木だよ。

良　介：高木？

貞九郎：ホラ，東光大学のボクシング同好会の高木・・・・大学の時によく試合をしたじゃないか。　（同上）

(75) 仕様がないだろ。現実がそうなら仕様がないじゃねえか。

（同上）

また，次の例を見よう。

(76) a.　（聞き手にむかって）ほら，やればできるじゃないか。

b.　母子ともに健康で，よかったじゃないか。

(76a)の場合，聞き手が「できない」と決めつけていた（「できる」可能性を排除していた）ことに対して異議を申し立てるとともに，聞き手に対して，これまでの自分に対する見方をかえて「自分はできる」ことを認識するよう要求している。また，(76b)の場合は，「よかった」と評価することに対して積極性が不足しているとして，聞き手に対して「見方をかえてもっと積極的によかったと評価せよ」と促していると考えられる。

pの可能性を排除していた話し手がそれまでの見方をかえて「pが真である」と認識することを表す「pジャナイカ」（蓮沼1993のいう「発見の驚き」）については，情報受容を表す「pカ」（森山1992，いわゆる「納得の

カ」）との意味の違いが問題になるが，両者の違いはやはり情報受容の手続きの違いとしてとらえられるように思われる。

(77)（一見何か入っていそうな箱をあけて）

a．なんだ。空か。

b．なんだ。空っぽじゃないか。

(78)（幾何の問題を解いていて）

a．なるほど。ここに補助線を引けばいいのか。

b．なんだ。ここに補助線を引けばいいんじゃないか。

(77a)(78a)には，「箱の中が空でない（ここに補助線を引かない）可能性もあったんだが」というニュアンスがある。つまり，話し手は，真であるとして理解した内容pを知識として定着させる（～pの可能性を知識から排除する）ことをいったん留保し，一時的に発話時以前に想定していた～pの可能性をもちだしてpの正しさの確認をおこなっていると考えられる。（この点については森山1992bも参照のこと。）

(79)　p　　[理解]

↓

p ∨～p

↓

p（∨～p）　　[確認]

↓

p　　[知識として定着]

これに対し，(77b)(78b)は，話し手自身が発話時直前まで「空である（ここに補助線を引く）」という可能性を排除していたことに対する自己批判というニュアンスがある。（同時に，目の前の箱がいかにも「空である」可能性を排除するような外見をしている，あるいは，眼前の図が「ここに補助線を引く」ことを思いつきにくくするような形になっていることに対する異議申し立てというニュアンスもある。）

つまり，話し手としては，「pではない」とする話し手の既成知識と「p

であるとせざるをえない」とする発話時における話し手の理解との間で～p∧pという矛盾状態が生じていることを受けて，矛盾律を適用してpである可能性を受け入れ，それまでの見方をかえて「pである」ことを確認しているわけである。

(80)　～p　　［既成知識］
↓
～p∧p　　［理解p導入］
↓否定
p∨～p
↓
p（∨～p）　　［確認］
↓
p　　［知識として定着］

6. おわりに

本敲では，誘導型疑問文（非分析的な否定疑問文）に関する筆者の基本的な考えを述べた。ポイントだけを簡単にまとめておこう。

- 単純疑問文「p（～p）カ」は，「p（～p）の可能性が排除されていない」文脈でp（～p）の真偽を問題にするための疑問文である。
- 誘導型疑問文「p（～p）ナイカ」は，「p（～p）の可能性が排除されている」文脈で，排除されている可能性p（～p）を導入して，その真偽を問題にするための疑問文である。

誘導型疑問文の意味（非分析的なモダリティ表現としての「ナイカ」の意味）と「ナイ」「カ」の基本的な意味との関連という最も重要な問題についてはふれることができなかったし，命題疑問文の体系についてもまだ論ずべきことは多い。しかし，少なくとも，誘導型疑問文と単純疑問文の違いについては従来よりは具体的な議論ができたと思うし，今後，命題疑問文の体系及び疑問文の発話に関するモデルを考える際の，また，日本語以外の言語に

おける否定辞を含む疑問文の意味について考える際のひとつの視点を提供することはできたと思う。

特に，否定辞を含む疑問文に関する外国語との対照研究については，問題点の整理を含め，考えねばならない問題は多い。今後の課題としたい。

注

1　非分析的な否定疑問文，とりわけ「いっしょに行きませんか？」のような提案（勧誘）を表すタイプは，「相手が行くか行かないかをたずねるのではなく，行ってほしいという勧誘の目的で行われる発話である」（水谷1985：p.154），「形は疑問文であっても意図は質問ではない」（同）というふうにいわれることがある。これに対し，「いっしょに行きませんか？」も基本的には「行くか行かないか」を問題にする文であり，「行ってほしいと勧誘する」という意味が生ずることはそれとは別のレベルの問題である，というのが筆者の考えである。

2　「行きはしないか」「行くのではないか」のような「ハ」を含む誘導型疑問文は，基本的に推測的な意味になる。「～ｐナイカ」も基本的に推測的な意味を表し，提案（勧誘）を表す「行かないか／行きませんか」に対応するような「否定提案」を表すことはない。

・*行かなくない（か）？／*行かなくありませんか？

cf. 行かないことにしないか？／行かないでおかないか？

3　「ノデハナイカ」と確認要求の「ダロウ」との違いについては，安達（1992）を参照のこと。

4　山口(1990：p.16)による次の説明も，基本的には同じ趣旨であると見られる。（下線井上）

予想された判断の確認に重点をおく意図的な疑念の表明には，（略）予想された判断の否定態を解答案とするかたちがとられることになるだろう。予想された判断を確認するには，もう一度その予想の正しさを疑ってみることが必要であり，それはとりもなおさず予想とは逆の判断が成り立つかをためしてみることだからである。

5　田野村（1991：p.118）にも次のような説明がある。

肯定疑問文には，問題の行為を聞き手が承諾するものと始めから見込んでいる感じが伴うのに対し，否定疑問文は，聞き手による不承諾の余地をより大きく残している。

6　⒁については，山口（1990：p.71）でも次のような説明がなされている。

これらはどちらも「……逢ッタ」ことを予測した表現と見うる。しかし，

(1)［井上注：＝14b］にはその予測の正否を疑っている話手の気持は別に感じられないのに対して，(2)［＝14a］には「……逢ッタ」ことへの予測とともに，その予測が正しくない可能性への配慮も感じとれる。

7　ｐの真偽が決まれば～ｐの真偽も決まるから，ｐの真偽を問題にすることと～ｐの真偽を問題にすることとは表裏の関係にある。しかし，「ｐの可能性に言及してその真偽を問題にする」ことと「～ｐの可能性に言及してその真偽を問題にする」ことは決して同じことではない。

このことは「カモシレナイ」との比較で考えるのがよい。「ｐカモシレナイ」は，（「ダロウ」などと異なり）話し手がｐと～ｐの両方の可能性を想定していることを表す。

・明日は雨かもしれないし，雨じゃないかもしれない。

・明日は雨じゃないかもしれないし，雨かもしれない。

cf.　＊明日は雨だろうし，雨じゃないだろう。

しかし，ｐの可能性に言及する「ｐカモシレナイ」と～ｐの可能性に言及する「～ｐカモシレナイ」は決して同じ意味を表すわけではない。

・明日は雨かもしれない。

・明日は雨じゃないかもしれない。

つまり，ｐと～ｐ両方の可能性を想定していることと，そのうちの一方に言及することとは別の問題なのである。同じように，「ｐの可能性に言及してその真偽を問題にする」ことと「～ｐの可能性に言及してその真偽を問題にする」ことは，論理的には同じ結果をもたらすが，決して同じことを問題にしているわけではない。

8　(28b)は「え？（辛くないと聞いていたけど）本当は辛くないんですか?」のような情報受容的問い返しを表す場合は自然。

9　Yamamori (1993) では，「話し手と聞き手の認識のずれは誘導型疑問文の発話に関与しない」という主張がなされている。(33)のような例があることからもわかるように，話し手と聞き手の認識のずれは誘導型疑問文の発話に本質的に関与するものではない。しかし，筆者は，少なくとも「発話場面における話し手の認識」とそれ以外の世界（外部世界）とのずれは誘導型疑問文の発話に本質的に関与すると考える。

10　これはちょうど，「ダロウカ」における「ダロウ」が，推量を表すというよりは「問題が解決されることを前提としない」こと（聞き手がいる場合は森山

1989のいう「聞き手情報非配慮」）の標識として機能するのと似たところがある。

11　田野村（1991：p.118）も，提案（勧誘）・依頼を表す誘導型疑問文について次のように指摘している。

聞き手が予想していない行為や（中略）聞き手の予定や意志に反する行為をするように誘うときには，明らかに否定疑問文のほうが適している。

12　この点については，「よ」が付加された命令文の意味に関する益岡（1991：p.99）の議論に負うところが大きい。なお，井上（1993：pp.346-347）では，益岡の議論を受けた形で，「よ↓」（低くおさえられて発音される「よ」）が付加された命令文が「説得」のニュアンスを持つことがあることを指摘した。

父：（電話で母親と話している娘に）ちょっとパパとかわってよ↓。

娘：いや。私，まだママと話したい。

父：頼むからパパとかわってよ↓。

13　真田(1983：p.97)は，「取ってくれない？」よりも「取ってくれる？」の方が「比較的丁寧度の低いストレートな表現と言える」とし，「少なくとも若い世代には肯定形式の方がより一般的なものとなっているようである」と報告している。この「ストレートな表現」ということをもう少し具体的に言えば，「少々聞き手の意向を無視しているというニュアンスが生じても，それよりは最初から話し手の願望が前面に出るような言い方になることを避ける」ということになろう。

14　本稿で扱うのは直接疑問文としての誘導型疑問文であるが，埋め込み疑問文にも誘導型疑問文に相当すると見られるものがある。

・[大型店進出に関する規制をもう少し緩和でき]ないか，今検討しているところである。仮に［これ］が実現されれば…

・[建物の中にまだ危険物が残ってい]ないかどうかを厳重にチェックせよ。そして，もし万が一［その］ようなことがあれば…

この場合も，問題にされているのは「規制をもう少し緩和できるかどうか」「建物の中にまだ危険物が残っているかどうか」である。実際，後続する代用形「これ」「その」は「規制がもう少し緩和できる」「建物の中にまだ危険物が残っている」を代用する。

同じことは山梨（1992：pp.43-44）があげる次のような例にもあてはまるだろう（括弧のつけ方は原文のまま）。

・佐藤氏はなんとか［社用にかこつけて葬儀を欠席できないものか］と考えてみた。しかし，なにしろ叔父は実の弟なのだから，［そう］もでき

まい。それでしぶしぶ式に参列することにした。（山梨1992）

・［初対面のあなたにかんしゃく玉を破裂させることにならないだろうか］と，［それ］が実は心配だったのです。まあ，それさえ覚悟しておいてくれるなら，話すのにやぶさかではありませんが。（同）

山梨はこれらの例における埋め込み疑問文を単純否定疑問文と考えているようだが(山梨1992：p.52 注9)，筆者は誘導型肯定疑問文であると考える。

15　誘導型疑問文（46b）の場合，次のような推論を通じて「外部世界においてはpの可能性が排除されている」という想定がなされると考えられる。

前提1：聞き手は「おいしそうな表情をしていない」。

前提2：聞き手にとって「おいしい」ならば，聞き手は「おいしそうな表情をする」。

結　論：したがって，聞き手にとっては「おいしくない」。（後件否定）

これに対し，単純否定疑問文（46a）の場合は，次のような推論を通じて「～pの可能性もあるがpの可能性もある」という想定がなされると見られる。

前提1：聞き手は「おいしそうな表情をしていない」。

前提2：聞き手にとって「おいしくない」ならば，聞き手は「おいしそうな表情をしない」。

結　論：したがって，聞き手にとっては「おいしくない」か「おいしい」かのどちらかである。

16　英語の否定疑問文に関する研究においても，誘導型疑問文的な解釈を受けると見られる否定疑問文は基本的には「～pの真偽を問題にする」疑問文としてとらえられているようである。

例えば，Leech（1983）（池上・河上訳1987：pp.157-158）は，

・Won't you help yourself?　　（ご自由にお取りになられませんか？）

の意味について次のような説明を加えている。（訳は池上・河上訳1987による。下線井上）

私はあなたがご自由にお取りになるのを望んでいるし，そのように期待しています。しかし，今あなたはご自由に取ろうとはなさらないように見受けられます。<u>これは本当にそうでしょうか？</u>

下線部の説明は実質的に「～pの真偽を問題にする」単純否定疑問文

・（本当に）ご自由におとりにならない（ん）ですか？

に対する説明であり，誘導型疑問文

・（そのように遠慮なさらずに）ご自由におとりになりませんか？

に対する直接の説明にはなっていない。Lyons（1977: p.765)による次の説明に

ついても同じことがいえるだろう。（訳は太田1980: p.624による，下線井上）。

pが真であるという話者の前々からの信念と，～pが真であることを示唆するような現況証拠との間に摩擦があり，話者は～pを疑問視し，意外だと思って否定疑問文を発する。（下線部の原文は，He questions ～p because it is the negative proposition that occasions his doubt or surprise.）

17　本稿では考察の対象としなかったが，次のような疑問文は，単純否定疑問文と誘導型疑問文の中間的な性格を持つものとして興味深い。

・こんなことくらい，何とかならないんですか!?（「ならない」に強勢）

・社長の様子がおかしいことに誰か気がつかなかったんですか？

（「つかなかった」に強勢）

cf.　どうにもなりませんか？　（単純否定疑問文）

何とかなりませんか？　（誘導型肯定疑問文）

これらの疑問文は，基本的には「何とかなる」「誰か気がついた」可能性がその場で否定・排除される，その演算そのものの妥当性を問題にしている。その意味では，どちらかといえば単純疑問文に近いと考える。

・［［［何とかなる］　否定］カ］

しかし，「否定」と「疑問」という演算子の相互作用ということも，「～ナイカ」の形式を有する疑問文に「pである可能性が排除されている文脈でpの真偽を問題にする」という機能が託される理由について考える上で無視できないことではある。

18　田野村（1991：p.122）では，この種の文脈で用いられる否定疑問文は「～pであるべきことがちゃんと～pとなっているか」という意味の単純否定疑問文として扱われている。（この場合，「ひょっとして」は共起しない。）

・（注意書きにあるように）（??ひょっとして）ちゃんと［テープは終わりになっていません］か？

確かにこのような解釈も可能ではあるが，ここで問題にしている

・（注意書きに書いてあることに反して，ひょっとして）［テープが終わりになってはい］ませんか？

という誘導型疑問文としての解釈（この場合「ひょっとして」が共起可能）とはまずは区別してとらえるべきである，というのが筆者の考えである。

19　日常会話では，「録画できない」状況で，

・ひょっとして，テープが終わりになってる？　（単純肯定疑問文）

・ひょっとして，テープが終わりになってない？　（誘導型疑問文）

の両方を使うことが可能である。単純肯定疑問文の場合は，

前提１：「録画できない」。

前提２：「テープが終わりになっている」（ｐ）ならば「録画できない」。

結　論：したがって，「テープが終わりになっている」か「終わりになっていない」かである。

のような推論にもとづいて発されると考えられるが，誘導型疑問文の場合はこれとは異なる（しかし同じ場面で有効な）推論にもとづいて「ｐの可能性が排除されている」という想定がなされると考えられる。

前提１：「録画できない」ことはあってはならない。

前提２：「テープが終わりになっている」（ｐ）ならば「録画できない」。

結　論：したがって，「テープが終わりになっている」こともあってはならない。

20　中国語では，(63a)のようなケースで反復疑問文（述語の肯定形と否定形を並べる形，基本的には単純肯定疑問文に近い意味を表す）の使用が可能である。

・計算が間違っていませんか？　もう一度計算してください。

cf. ??計算が間違っていますか？　もう一度計算してください。

・你是不是算錯了？　請再算一遍。　（原文簡体字）

（張亜軍他編著・林芳編訳1982『中・日・英対照：実用中国語会話』白水社　pp. 120-121）

日本語と中国語とでは，何をもって「ｐの可能性が排除されている」とするか，ということについて少しずれがあるのかもしれない。

21　もっとも，催促を表す誘導型疑問文は，(i)必ず下降イントネーションをともない，上昇イントネーションはともなわない，(ii)「カ」を省略することができないなどの点（田野村1988）で，通常の誘導型肯定疑問文とは異なるところがある。しかし，同様の関係は，通常の単純疑問文と「ｐである可能性を排除する」表現としての単純疑問文「ｐカ」の間にも観察される。

・お前におれの気持ちがわかるか（↓）！

≠お前におれの気持ちがわかるか↑？

≠お前におれの気持ちがわかる？

催促を表す誘導型疑問文「ｐナイカ」と可能性排除の表現としての単純疑問文「ｐカ」が(i)(ii)のような性質を持つことの意味あいについては，敲をあらためて論ずる予定である。

22　森山（1989：p.118）は，確認要求的な「ｐジャナイカ」について，「話し手が聞き手と違った意見であるという意味の上に，さらに，話し手のほうが正しいという意味を持つようである」と述べている。また，「驚き」のニュアンス

を有する「ｐジャナイカ」については，「驚きのニュアンスとは，自分をスプリットさせてそうは思わなかったというもう一人の自分，あるいは聞き手に対して，事実はこれこれである，と認定しつつ言うという意味構造上のギャップから出てくるのである」と述べている。

参考文献

安達　太郎（1991）「いわゆる「確認要求の疑問表現」をめぐって」『日本学報』10
————　大阪大学文学部日本学研究室
（1992）「「傾き」を持つ疑問文－情報要求文から情報提供文へ－」『日本語教育』77
井上　優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」」『研究報告集14』国立国語研究所
今井　邦彦・中島　平三（1978）『現代の英文法５：文Ⅱ』研究社
内井　惣七（1992）『推理と分析』（放送大学テキスト）　放送大学教育振興会
太田　朗（1980）『否定の意味』大修館書店
大西　智之（1989）「日本語と中国語の否定疑問文」『中国語学』236
久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
坂原　茂（1985）『日常言語の推論』東京大学出版会
真田　信治（1983）『日本語のゆれ』南雲堂
田野村　忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152
————（1990）『現代日本語の文法Ⅰ：「のだ」の意味と用法』和泉書院
————（1991）「疑問文における肯定と否定」『国語学』164
中右　実（1984）「質疑応答の発想と原理」『日本語学』3－4
仁田　義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
蓮沼　昭子（1993）「日本語の談話マーカー「だろう」と「じゃないか」の機能－共通認識喚起の用法を中心に－」『第１回小出記念日本語教育研究会論文集』
服部　匡（1991）「命題否定に関する覚書」『徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）』26
原田　登美（1988）「続・日本語ワンポイントレッスン（第６回）」『言語』17－10
長尾　真・淵　一博（1983）『岩波講座情報処理７：論理と意味』岩波書店
益岡　隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
水谷　信子（1985）『話しことばの文法』くろしお出版
森田　良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
森山　卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版

――――　(1992a)「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101
――――　(1992b)「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59　大阪大学国語国文学会
毛利　可信 (1980)『英語の語用論』大修館書店
山口　堯二 (1990)『日本語疑問表現通史』明治書院
山梨　正明 (1992)『推論と照応』くろしお出版
于　　日平 (1984)「「うちけしのたずねる文」から「働きかける文」への移行について」『語学教育論叢』創刊号　大東文化大学
Givon, Talmy (1978) "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology", Syntax and *Semantics 9*, Academic Press.
Leech, Geoffrey, N. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.（池上嘉彦・河上誓作訳 (1987)『語用論』紀伊国屋書店）
Lyons, John (1978) *Semantics 2*, Cambridge University Press.
McGloin, Hanaoka Naomi (1976) "Negation", *Syntax and Semantics 6*. Academic Press.
Shibatani, Masayoshi (1972) "Negative Questions and Conveyed Meaning", *Papers in Japanese Linguistics* 1—2
Yamamori, Yoshie (1993) "Japanese Negative Questions as a Communicative Meta-Sign"，第4回国際語用論会議（於神戸）におけるポスター発表

付記：相澤正夫氏，山崎誠氏，浜田麻里氏との議論，そして山森良枝氏，野田春美氏，鄭相哲氏からのコメントは考えをまとめる上で有益であった。また，ポリー・ザトラウスキー氏の励ましがなかったら本稿はこのような形では成立しなかった。記して感謝申し上げる。
なお，本敲は，日本語教育センター第一研究室平成4～5年度一般研究「日本語の対照言語学的研究：疑問表現に関する文法論的研究」及び平成4～6年度特別研究「日本語否定表現の用法に関する基礎的研究」における研究成果の一部である。

後記：校正の段階で，鄭相哲(1993)「YES-NO疑問文における否定と片寄り」（『岡大国文論考』21）を見た。本稿とは多少視点が異なるが，重要な観察が含まれている。